

ドラマチックに生きる

―新島襄と八重を会わせたもの―

講演	百合野 正博〔ゆりの・まさひろ〕
講師紹介	同志社大学商学部教授
研究テーマ	説明責任と情報公開と独立監査の重要性

今日のテーマ

今日は、現在放映中のNHK大河ドラマ「八重の桜」にからめて、石橋を叩いて渡るのもいいけれど、神の見えざる手を信じてドラマチックに生きる方が面白い、という話を用意してきました。

「同志社はいよね、新島襄という名前が高校の教科書に出てくるから」と、何度聞いたことでしょう。確かに、山川出版社の教科書には次のように解説されています。
「1877（明治10）年に総合大学として官立の東京大学が設立され、（中略）官僚・技術者・学者など、国家の指導的人材を養成する機関となった。また福沢諭吉の慶応義塾、大隈重信の東京専門学校（のち早稲田大学）、新島襄の同志社などの私学は、時代にふさわしい個性ある学風により、政界・実業界・言論界などに人材を送った。」（島海靖（やすし）他著『現代の日本史A』山川出版社 2009年）

「教育は主として政府の力で進められたが、福沢諭吉の慶応義塾、新島襄の同志社などの私学も創設され、特色ある学風を発揮した。」（石井進他著『詳説日本史』（改訂版）山川出版社 2003年）

でも、「時代にふさわしい個性ある学風」や「特色ある学風」の中身については書かれていませんし、「時代にふさわしい」という「時代」が幕末から明治にかけてのことを指しているのか、それとも今もふさわしいと言えるのか、よく分からない書き方です。第一、同志社と早稲田と慶応義塾をひとまとめにして「特色ある学風」と書くなんて無責任すぎます。

では、同志社の学風の特色は何でしょうか。今日は、学生の皆さんは普段あまり考えたことがない同志社の学風についてお話しますが、その前に、少し「八重の桜」についてお話ししましょう。

「八重の桜」が
若い人にするエール

「八重の桜」を見ている人は手を挙げてみてください。ほとんど挙がりませんね。綾瀬はるかという人気女優を起用したのに、視聴率はもう一つ伸びていないようです。それはなぜでしょう。

ドラマを見ていて思うのですが、登場人物が多いですね。有名人もいるのですが、会津藩の藩士なんか、誰が誰だかよく分かりません。毎週見ている私ですら、誰だかよく分からない人がいっぱいいます。おまけに、「八重の桜」と同じ時代を扱った大河ドラマは、これまで「花の生涯」「三姉妹」「竜馬がゆく」「勝海舟」「花神」「獅子の時代」「翔ぶが如く」「徳川慶喜」「新選組!」「篤姫」「龍馬伝」と、なんと11本もあるのです。11本分を1本にぶち込んでいますから、やたらとサイドストーリーが幅を利かせることになります。それに、福島を元気づけると言いながら、最近では京都と江戸のエピソードばかり。新島先生もあまり出てこないし、ちょっと退屈です。子供のころの新島襄が佐久間象山塾でブタを追いかけて「新島七五三太」と名乗ったシーンは、ちょっと面白かったものの、全体に地味です。

NHKの発表によりますと、「八重の桜」は、八重さんの生き方を通して女性を勇気づけること、会津藩の不屈の精神を描くことによって東日本大震災の被災地とくに福島を慰めること、および、敗れた側の視点から通説ではない幕末・明治を描くこと、をテーマにしているそうです。

私は、これまで見てきて、まず、若い人たちにエールを送っているのだと感じています。老けた役者さんが演じている登場人物もいるのですが、実際にはみんな若いのです。1864年、国禁を犯して脱国をした新島襄は21歳でした。この年、山本八重は19歳、松平容保は28歳、徳川慶喜は27歳、板垣退助は27歳、木戸孝允ですら31歳だったのです。山本覚馬と西郷隆盛は36歳、岩倉具視は39歳、勝海舟は41歳で、このあたりは少し老けています。何と、西田敏行が演じている西郷頼母は34歳です。とても34歳には見えません。それはさておき、少なくとも、新島襄がアメリカに渡ったのは、皆さんとほぼ同じ年頃でした。若くても、大きなことができるのです。あるいは、若いからこそ、大きなことにチャレンジできるのかも知れません。

「八重の桜」が暗示する
「神の見えざる手」

もう一つ、私は、このドラマを見ていて、神の見えざる手の存在を強く感じます。今のところ、新島先生と八重さんは全く別の人生を歩んでいます。第1回でちょっと映りましたが、新島襄がボストンに到着した年に、八重さんは川崎尚之助と結婚しました。新島襄がアーモスト大学で勉強に励んでいたとき、八重さんは会津戦争でスペンサー銃を撃ちまくっていました。新島襄がアンドーヴァー神学校で牧師になる準備をしていたとき、八重さんは山本覚馬を頼って京都にやってきました。そして、新島襄が岩倉使節団と会見していたころ、八重さんは京都の女紅場の教導試補となります。二人はこの3年後にようやく初めて会うことになります。

二人は赤い糸で結ばれていたと言えるかもしれませんが、私には、現在の寒梅館のところに建っていた学生会館の壁に書かれていた「Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!」という新島先生が第1回の卒業生に贈った言葉が二人にはふさわしいと思います。全く別の人生をひたむきに生きていた新島先生と八重さんは、普通だったら巡り会はずのない人生の接点で、多分、神の見えざる手の導きにより、出会って結ばれることになります。

恋愛中の諸君は、そうそう、自分たちも神の見えざる手に導かれて相手を見初めた、と同感してくれるかもしれませんが、この言葉は、男女の出会いにだけ当てはまるものではありません。人生に迷ったとき、前の方を見通す勇気を与えてくれるのです。

私に大学教授になるチャンスを与えてくださった西村民之助名誉教授も、私が壁にぶつかるたびに「勇気をもって前に進みなさい、道は必ず開けるから」と励ましてくださいました。同じ意味ですね。この新島先生のエールを唱えたら、本当に前に進む勇気がわくのです。若い皆さんにはまだピンとこないかもしれませんが、私がそのことを強く感じた経験をお話ししましょう。

グレース教会で
話しているのは
神の見えざる手の
お導き？

「八重の桜」でぜひ取り上げてほしいエピソードに、「2ドルを寄付した老農夫の話」があります。

1874年10月、帰国の1カ月前に、ラットランドのグレース教会で開かれたアメリカンボードの年次大会で、新島襄は日本にキリスト教主義の大学を設立するための寄付を募るスピーチをしました。声涙俱に下る先生の訴えに応じて約5000ドル集まった寄付のなかに、帰りの汽車賃2ドルを寄付した一人の老農夫の話が伝えられています。広告賞をもらった同志社創立125周年のポスターには、「その農夫は、帰りの汽車賃を日本の未来に捧げた」という素晴らしいキャッチコピーが光っていました。

で、そのスピンオフ企画なのですが、この2ドルの汽車賃でその当時どこまで行けたのかという疑問から始まり、6セントで1里乗れるという父民治宛の新島襄の手紙の記述から2ドルで130キロ乗れる、ラットランドとアーモストの直線距離が130キロ、そして、その年が同志社創立130周年、という偶然の重なりと勢いから、2005年9月に、有志学生がラットランドからアーモストまでを踏破するという企画につながりました。詳しくは、学生支援センターのホームページで「新島メモリアル・ウォーク」を検索してみてください。

この写真は、グレース教会での出発式で私がスピーチをしているところです（写真①）。説教台の上の大きな聖書は、実際に新島先生がそこでスピーチをしたときのものを教会の方々が出してくださいました。スピーチをしながら、同時に、私の頭の中を「もしも、もしも、もしも・・・」が駆け巡りました。私が今ここでスピーチをしているのは、偶然の産物である。それも、一つではなく、いくつもの偶然の産物である。もしかしたら、その偶然は、偶然ではなく、神の見えざる手によるお導きだったのか。

そうなんです。この企画の予算は、その前年の文科省補助金の目玉だった、特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）の予算を本学が獲得したから捻出できたのです。学生支援センター所長だった私がヒアリングに臨んだのですが、質問の中心人物は、その2カ月ほど前にたまたまある委員会で知り合った某国立大学の元学長でした。3回ほど開催されたその委員会の前後に、本学の旧学生支援センターの取り組みについていろいろ話をしていたので、私の主張したいことを質問してくださったのでしよう。もしもこの委員会のメンバーにならず、その元学長と知り合っていなかったら、ひょっとしたら採択されていなかったかもしれません。

そして、もしも私が学生部長でなかったらグレース教会にはいなかったわけですが、前任者の推薦で学生部長に任命された遠因は、1983年9月にミラノのお城で前任者の先輩と知り合って20分ほど一緒に歩いたこと、そして、その1週間後にローマの小さなホテルで彼に再会するとともに前任者の別の先輩とも知り合ったことから、前任者が同志社大学に赴任して以来友人になったからであり、もしもこのイタリアでの巡り会いがなかったら、私は学生部長にはなっていなかったことでしょう。

なによりも、そもそも私が同志社大学に進学していなかったら、愛校心にあふれた同志社大学の教授にはなっていなかったに違いありません。私が同志社大学に入学したのは東大の

入試がなかったからであり（と、私は思っている）、１９６９年の東大紛争は、私を同志社大学に入学させるためだったのか、というむちゃくちゃ自己中心的な考え方にまで行き着いたのです。

同志社大学に進み、同志社大学教授になって、同志社創立１３０周年に、ラットランドのグレース教会でスピーチをする、そのための人生だったのか、と考えたときに、「Mysterious Hand guide you!」という神の見えざる手の存在を改めて意識したのです。

あなたは、なぜ、 同志社に来たのか・・・ ドラマチックに生きよう

今、この教室で私の話を聞いている諸君も、多分、神の見えざる手に導かれてここにやって来ているのです。せっかくだから、自分がなぜ同志社に来たのか、ちょっと考えてみてください。

新島襄が同志社を創立した思いを振り返ってみましょう。入学式で、学生支援センター所長が朗読する『同志社大学設立の旨意』に建学の精神が凝縮されています。

新島襄はたくさんの言葉を残しましたが、なかでも、独自一己・自治自立・倜儻不羈は、現代の日本でも非常に重要な考え方です。寄らば大樹の陰や、長いものには巻かれろ、と真っ向から対立する、他人（ひと）が何と言おうと自分自身の考え方を貫く、という独立性にあふれた自由人を育てる雰囲気は同志社には残っています。それを知らないまま同志社を卒業していくのは、もったいない。

今、学生諸君の多くは、授業に出席し、板書をノートに書き写し、試験を受け、ヒマな時間にはアルバイトをし、時期がきたら就活をして社会に出る、という学生生活を送っていることでしょう。でも、ちょっとだけ修正してみませんか。講義に出席するだけでなく、授業以外のさまざまな機会を使って自発的に学び、課外活動にも積極的に関わり、社会に出る意味を十分に考えてから社会に出る、という学生生活を送ることにしてみませんか。

ちょっと頭の中に同志社のキャンパスを思い浮かべてみてください。そのための仕組みが今の同志社のキャンパスにいっぱい揃っているのです。

チャペル・アワーや講演会、函館キャンプや熊本キャンプ、ローム記念館プロジェクトやプロジェクト科目、図書館やラーニング・commons、そして、キャンパスを取り囲む古都京都。カレッジソングや応援歌を口ずさみながら市内を散策すれば、ドラマチックな人生のヒントに巡り会えるかも。これらのことにいったん気づいたら、同志社を学び、知りたくなるまでもう少しです。

私の学生時代、本ばかり読む若い人たちに向かって、寺山修司は「書を捨てよ、町へ出よう」と呼びかけました。私は、今日、皆さんに、「スマホを捨てよ、顔を上げて周りを見よう」と声をかけます。このスマホ、便利のように見えますが、机の上のスマホに指をおいて答えている学生諸君を見ると、私は、森博嗣の小説に出てくる１シーンを思い出します。実は、スマホが主人で、諸君はスマホに使われている人造人間に過ぎないのではないかと。そう思えて仕方ないのです。せっかく細胞のいっぱい詰まった脳をもっているのに、それをほとんど活用しないで、瞬間瞬間に情報を得て受け答えしている人間を、スマホがコントロールしている。みんながスマホの画面に入っている電車の中の景色は、ゾンビだらけのホラー映画そのものに思えてなりません。

スマホを捨てて周りを見回せば、今まで見えなかった神の見えざる手の存在に気づく機会が増えるかもしれません。たった３冊の本が新島襄をアメリカに旅立たせたように、今は気づいていないある目的に向かって、皆さんを導いてくれるドアが開かれていることに気づくかもしれません。

最後に「八重の桜」に戻しましょう。巷では、オダギリジョーでは視聴率が期待できないので新島襄の出番を減らすとか、西島秀俊の肉体美を多用するとか、いろいろ噂されていますが、私は神の見えざる手の存在を信じています。後半はさっと新島襄と山本覚馬と八重さんが同志社を作り上げていくプロセスが描かれるに違いない、そう思えてなりません。同志社の学生諸君がそれを見て新島先生の強い信念を理解し、同志社で学ぶ意味に気づき、そして、自分の人生をドラマチックに生きていく第一歩を踏み出してくれることを期待しています。

2013年5月30日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「講演」記録